

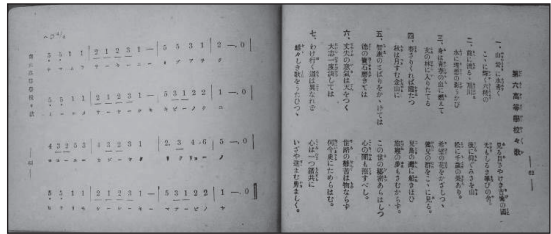
ぜんこくかくこうとうがっこうせんもんがっこうおよびだいがく  
こうかおよびりょうかしゅう おんぶつき

＃31 全國各高等學校專門學校及大學校歌及寮

歌集 音譜附

編纂：神戸吉助（かんべ・よしすけ 生没年不詳）

刊行：大正6年（1917）



※左より、表紙、p. 62「第六高等学校の歌」



♪ 解題

■ 内容

明治期に創設された旧制第一高等学校から旧制第八高等学校のほか、東京高等商業学校、東京高等工業学校、商船学校、早稲田大学、慶應義塾大学、日本女子大学、東京女子師範学校の校歌ないし寮歌 49 曲が所収されている。一部を除き、右ページに歌詞、左ページに数字譜が掲載されている。

高橋佐門によると、寮歌は、校歌、記念祭歌、運動部歌、各部歌、応援歌、逍遙歌、送別歌、頌歌、寄贈歌等に分類される各種のものを含み、広く寮歌と呼ばれるようになった、とある。中でも校歌は「本来ならば一校一つの儀式歌なのであるが、(中略)校歌のないところも少なくない。一高、三高、五高、七高(略)がそれであり、全体の三分の一に近い。」と指摘している。

## ■ 作者

編者である神戸吉助については委細不明であるが、本書の「序」において神戸は、「世は挙げて偷安逸楽の夢をむさぼり、人は悉く萎微沈滞の淵に彷徨す」と現状を憂えている。本書を全国に流布することにより「其歌詞の雄大壮麗、其歌曲の莊嚴幽婉、凡て金玉の響あり。聽て此校歌及び、寮歌が全国を風靡する時、淫靡なる歌曲は地を拂つて青年の意気の揚るや必せり。」と記し、校歌及び寮歌に対する期待の大きさを伺わせる。(引用箇所は一部、旧字を新字に改めている。)

## ■ 校歌

校歌が誕生した背景について、須田珠生は著書『校歌の誕生』において、「学校での唱歌教育を設けるより以前の「音楽」は、「淫猥卑劣」なもの」とされ、その状況を「改良」する方法の1つに、「学校唱歌を盛にする事」が掲げられたことを挙げている。

本書によると、「文部省は1891年6月17日に公布した「小学校祝日大祭日儀式規定」によって、(中略)儀式の場で、唱歌をうたうことを定め、唱歌は「すべて文部大臣の認可を必要とすること」とした。しかし、「文部省は「祝日大祭日ニ相応スル唱歌」の目途が付いているわけではなかった」ため、自校の校歌を作り、祝日大祭日儀式の場でうたうことを希望する学校が増えはじめた。一方、「校歌」が歌われ始めた1890年代は、校歌が各校固有の歌であるとは限らず、「どの学校でもうたえる《校歌》という唱歌も存在していた」と指摘している。

今日のように、学校独自の教育方針や地理的・歴史的環境を歌詞に込め、「郷土の歌」としての役割が見出されたのは、「大正期以降」としている。

## ♪ 参考文献

- ・『旧制高等学校研究 校風・寮歌論編』高橋佐門著 昭和出版 1978 [376.7/6]
- ・『校歌の誕生』須田珠生著 人文書院 2020 [767.6/277]